

長崎大学大学院教育学研究科
教職実践専攻

平成30年度

教育研究成果報告書



平成31年3月

学校・地域のニーズをふまえた教育実践研究

本教職大学院は、高い教育実践力を有するストレートマスターを育成すること、現職教員を対象として高度な指導力とマネジメント力を涵養する研修機会を提供することをその基本的ミッションとする。そのために、理論と実践を往還したカリキュラムを完備し、県・市・町教育委員会と教育課題を共有しつつ、地域の課題に対応した実践的教育研究力を強化することに注力している。その取組を発信するのに本誌「教育研究成果報告書」を発行し、幾らかでも長崎県の教育に資するヒントになればという思いである。

これまで本大学院は、教員養成機能の充実、教育実践力と指導力の向上、教育実践研究に関する多様な共同、教育委員会・学校・教育学部・教職大学院における連携等に焦点をあて、時代の要請に適う教育実践の在り方を検討してきた。そのなかで常に念頭においたことは、(1)大学院生が実践研究の成果を広く発表し、学外の教育関係者より深く学ぶ機会を設けること、(2)教育委員会と共有する教育課題を踏まえること、(3)地域の教育課題に対応した実践的教育研究力を強化すること、(4)地域の学校に還元できる教育実践研究を目指すこと、である。これら方針のもと、大学院生は自らの教育実践を通して、教師とは何か、教育とは何かを問い、深慮すること、大学院で学んだ専門的知識を活用して授業や子どもの実態を見取り、分析し、問題点を見出すこと、それら問題点を自らの課題に変換し、次の教育実践に反映させること、研究的な思考や理論を抛り所にして、個別的教育実践を支える一般的な見方や考え方を導くこと、等に日々取組んできたことと思う。このような営みには、県・市・町教育委員会、県教育センター、教科の研究部会、学校や教員とつながるシステム作りが欠かせない。常に大事にしたいポイントである。

本年度の大学院生による教育実践研究にもいくつか力作が目にとまった。学級経営に係る考察、教科指導の在り方や向上に向けた新たな提案など、いずれも子どもの実態や学校現場の実際を十分に踏まえた内容である。このような充実した実践研究を成し得た背景には、大学院生の努力のみならず、実習協力校の諸先生方を始め、県・市・町教育委員会、県教育センター等の先生方のご指導、ご助言、ご尽力があることを忘れてはなるまい。この場を借りて厚く御礼申し上げ、引き続き、本教職大学院における教育実践力の高度化のために、ご忌憚のないご意見を賜ることができれば真に幸甚である。

平成31年3月

長崎大学大学院教育学研究科
研究科長 松元 浩一

目 次

はじめに

学校教育実践実習の概要と報告 …………… 1

大学院生による学校教育実践実習の報告

実 習 1 …………… 2

実 習 2 …………… 3

実 習 3 …………… 4

実 習 4 …………… 5

実 習 5 …………… 5

教育実践と省察のコミュニティ 2018 …………… 7

「新しい時代の教育実践をめざして」

クロスセッション 2018 ……………13

教育実践研究成果の発表概要 ……………18

学校教育実践実習の概要と報告

学校教育実践実習のねらい

学校教育に関する基礎的・理論的な理解の上に、学校の教育活動全般を主体的に経験し、省察すること。また、学級経営、授業実践、生徒指導、教育相談等にかかわる課題や問題に関し、指導教員の指導の下で自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質・能力を培うこと。

構成

- ・ 学校教育実践実習 1 (学級経営、生徒指導)
- ・ 学校教育実践実習 2 (学級経営、授業実践)
- ・ 学校教育実践実習 3 (生徒指導、教育相談)
- ・ 学校教育実践実習 4 (各コース実践研究)
- ・ 学校教育実践実習 5 (各コース実践研究)

学校教育実践実習の内容

教職大学院における教育実習は、大学院生が学校の教育活動全般を経験できるように、「学校教育実践実習 1～3」において、便宜上、実習ごとに中心的な内容（学級経営・生徒指導、学級経営・授業実践、生徒指導・教育相談）が定められており、大学院生は、これらの実習を含む全ての実習（「学校教育実践実習 1～5」）において、主体的にテーマを設定し、実習の計画を作成し、積極的に取り組むことが求められている。

学校教育実践実習 1（学級経営・生徒指導）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、児童・生徒理解に基づく生徒指導等に必要な資質や能力の向上を目指す。

実習内容

学級経営補助や基本的生活習慣づくりの補助など、学級担任教師の活動の観察や補助活動を通して、学級経営の意義と実際について理解を深め、実践できるようにする。また、各教室の掲示物、児童・生徒の座席配置、安全への配慮などを、観察や担任教師からの聞き取り等を通して理解し、実践できるようにする。

また、児童・生徒の行動観察や指導補助を通して、一人ひとりの児童・生徒の個性や集団としての特徴などについて、さらに児童・生徒が学校生活、学級生活に満足感を持ち、楽しい学校生活を作っていくための条件などについて理解を深め、集団づくりやソーシャルスキルを育てるための手だてを修得する。

院生による学校教育実践実習 1 の報告

佐野 陽汰（教科授業実践コース）

私は、長崎大学附属中学校と長与町立高田中学校で学校教育実践実習を行わせていただきました。2つの学校では、生徒指導、生徒理解の方法を学んだり、授業実践を行いました。今回、教育自習を通しての気づきを紹介したいと思います。

長崎大学附属中学校では、普段の生活や府中祭等の行事での生徒指導・理解の手法を、観察を通して学びました。生徒の発言や行動の意図、それに対する先生の働きかけの方法を観察し、附属中学校の先生に直接質問をしたり、大学院の指導教官と考察を深めました。このとこで、今までよりも深く生徒を理解する視点を持てたり、生徒指導の手法を学ぶことができました。この経験を活かし、実践授業も行わせていただきました。事前に附属中学校の英語の先生の授業を観察させていただき、授業の手法を学びました。しかし、いざ実践となると上手くいかないことも多く、一度目の授業では、新しい文法や内容を学ぶ意味をうまく生徒に伝えることができずにいました。先生の指導を通して、二度目の授業では改善をして、学ぶ意義を生徒には伝えることができましたと思います。「教科書を教える」ではなく、「教科書で教える」ということを意識した授業ができたと考えています。

附属中学校の実習では、生徒理解・指導の方法を実践的に学んだだけでなく、視点をしっかり持ち観察をしたり、授業の構成をよく考える重要性を学びました。また、実習に

並行して、大学院では教科や教職の専門的な知識を学び、それを実習に生かすことができました。

来年度は学校教育実践実習 4、5 を行います。この一年間で学んだことを生かして、実際の英語コミュニケーションの中で文法を適切に使用することを可能にする活動や、生徒同士の会話を取り入れた実践的な授業方法を研究していきたいと思います。

学校教育実践実習 2 (学級経営・授業実践)

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、指導計画や学習指導案の作成、授業実践等を通して、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに授業力の一層の向上を目指す。

実習内容

学級経営の計画、学校の組織運営(校務分掌)の在り方について演習を通して理解するとともに、学級づくりのためのソーシャルスキル訓練の実習、討論を通しての話し方・聴き方の育て方等の能力の向上を図る。さらに、学級通信の作成補助などを通して家庭と連携する力量を高める。また、事例研究などを通して P(計画)―D(実施)―C(評価)―A(改善)のマネジメントサイクルによる実践ができるようにする。

また、教育課程編成の在り方や運営、具体的取組について実践的に学び、年間(単元)指導計画や学習指導案の作成、学習材の開発、及び授業参観や授業補助、授業実践等の活動を通して、教師の日常の活動を学び、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに、授業力を一層向上させる。

院生による学校教育実践実習 2 の報告

藤澤 真規子 (子ども理解・特別支援教育実践コース)

実習 2 は、「一人一人の自己実現を支え、心の居場所となる学級づくり」というテーマのもと、長崎市内の公立小学校の 1 年生の学級において行った。実習 1 での実態把握や課題把握をもとに、支援を要する児童にとって、学びに苦手さが見られる算数と意欲的に活動している図工の授業を実施し、その後授業を振り返り、授業内容の見直しや授業改善や支援を要する児童への支援方法の有効性を考察した。算数では、授業の流れカードやヒントカードなどを渡して支援を行ったが、あまり有効ではなかったため、内容等の工夫が必要だ

と考えた。図画工作では、手順を実演しポイントを短い言葉で説明しながら板書したので、流れが分かり、スムーズに楽しく活動できていた。図画工作は、支援を要する児童にとっても取り組みやすい教科であると考えられる。作品を完成させ、友だちの良いところを見付けようという目的の下、相互鑑賞を行った。周囲の児童は、支援を要する児童への偏見が減り、良さを認められるようになってきた。また、支援を要する児童は認められたことで自信を持つことができ、学級で安心して過ごせることが出来るようになっていくと考えられる。2つの授業実践を通して、支援を要する児童の周囲には、上手に関わることができる児童を配置することで、うまくリードしたり関わったりし、それがペア学習でのスムーズな話し合いに効果をもたらしたと考えられる。また、授業時間を細分化し、支援を要する児童が動ける活動を取り入れた方が、集中できる場面が増えた。授業をしてみて痛感したことは、日頃からの信頼関係を作っておくことがいかに大切かということだ。一緒に遊んだり、頑張っていることや良い行動などをどんどん褒めたりすることの重要性を再度、理解できた。今回の実習の学びを学校現場での実践に活かし、更に研究を深めていきたい。

学校教育実践実習3（生徒指導・教育相談）

目標

児童・生徒理解に基づく生徒指導、教育相談、特別支援教育、キャリア教育等に必要
な資質や能力の向上を目指す。また、一人一人の児童生徒のニーズに合った指導・支援
についての理解と適切な指導能力を培うことを目指す。

実習内容

児童生徒の持っている力を引き出すために、生徒指導の3機能である「自己存在感を
与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」を適切に位置づけ
た学級経営や教科指導を計画し実践する。

また、教育相談的視点を生かした集団づくり・授業づくりを計画・実践し、教育上の
配慮を必要とする児童生徒への合理的配慮の在り方についても理解し、実践する。

いじめ、不登校等の要因となる指導上の課題を見出し、改善のための具体的方策を考
え取り組むなどの実践ができるようにする。

院生による学校教育実践実習3の報告

山下 裕三（教科授業実践コース）

実習3では、諫早市内の公立高校の1学年6クラスにおいて、家庭科教育の授業を実践
させていただいた。高等学校に赴任して18年間、家庭科の専門教育に携わってきた私に

とって、今回、進学校で経験させていただいたことは大変意義深い。

家庭科教育は、一度きりの人生を、幸福で豊かな人生にしていくための人生設計に直結する教育である。誰もが自分の人生のデザイナーとなる。将来、必ず必要となる家庭生活に関する「知識及び技能」を「思考、判断、表現」させ、「自己調整をしながら、主体的によく学んでいこうとする力」につなげていく授業づくりが大切であるが、専門高校では他の専門科目と関連させながらじっくり時間をかけて取り組むことができた「家庭基礎」の内容も、進学校では2単位という少なすぎる時間に追われ、足早に消化していかなければならない。また、家庭科は人生のエネルギーの基盤を形成する重要な教科であるが、進学校には1名のみ配属が多く、生徒たちの将来の健康的な日常生活を実現させようと、日々葛藤しながら奮闘する現状が改めて理解できた。私は主に保育分野に関する授業を6クラス任せていただいたが、今日の日本の大きな課題である「少子高齢化」に追い打ちをかけるような「児童虐待」の増加問題の実態に着目させ、子育てを担う親の就労問題と絡ませて、解決策についてディスカッションさせた。今後も生徒の記憶に残る授業を心がけたい。

私の研究テーマは「豊かな心を育む高校家庭科教育の研究について」である。豊かな心とは、自他の幸せな人生を実現しようとする実践的な態度であると考えている。従って、家庭科教育を充実させることは、少なからず、現代の家庭生活に関する様々な社会問題を解決に導くための大きな原動力になると確信する。今後も、私自身、授業改善を試みながら、生活の質を向上させることのできる、豊かな心をもった生徒たちを育てていきたい。

学校教育実践実習 4・5（各コース実践研究）

目標

学校教育にかかわる実践研究課題について、自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。また、自ら実施した実践研究に基づいて「実践研究報告書」（最終レポート）を作成すること。

実習内容

受講生は、自らの実践研究課題を設定し、実践研究を中心とする実習を主体的に行うことが求められる。そのため、実践研究課題や研究計画等を記した実習計画書を作成し、計画に沿って積極的に実習を行い、実習終了段階では検証計画に基づき自らの実習を評価し、「実践研究報告書」（最終レポート）を作成する。

学校教育実践実習 4、同 5 の報告は、研究成果の発表概要として、後述の「教育実践研究成果発表」の項に、掲載されている。

学校教育実践実習の振り返りの会（コロコロ会）

昨年度から研究科全体での実習の振り返り会（コロコロ会）を教員と大学院生が協働で企画をした。各班は、ファシリテーター1名（大学院生）、報告者2名（大学院生）と聴講者（大学院生2名と教員1～2名）で構成されている。実習を多角的に捉え、多様な視点から論究することで、学びを深化させる時間となった。

日時：平成29年12月18日（火） 13：45～17：40

場所：SCS 教室

内容：大学院実習の振り返り（ラウンドテーブル形式）

コロコロ会

～あなたに向かって

学びがコロコロ転がるよ～

12月18日(火) SCS教室にて

14：00～17：40

- ・「M1による実習ⅠⅡⅢの振り返り」
- ・「M2、M3による実習ⅣⅤの振り返り」

※ラウンドテーブル形式で行います



（昨年度の様子）



■スケジュール

時間	内容
13：45～14：00	受付
14：00～14：15	議会の挨拶と議題説明
14：15～14：20	各テーブルで自己紹介
14：20～14：55	セッション1（10分報告・2.5分協議）
14：55～15：30	セッション2（10分報告・2.5分協議）
15：30～15：40	休憩
15：40～16：15	セッション3（10分報告・2.5分協議）
16：15～16：50	セッション4（10分報告・2.5分協議）
16：50～17：00	休憩
17：00～17：35	セッション5（10分報告・2.5分協議）
17：35～17：40	議会の閉会

■参加のお申し込みは、12月6日(木)までに下記のアドレスをお願いします。

m-tateoka@nagasaki-u.ac.jp
（立岡昌文先生）

件名：コロコロ会の参加希望

・受付の際にお菓子代100円を集めます。
・ご不明な点がございましたら、立岡昌文先生にメールをお願いします。

実習で学んだことを、お菓子を食べながらみんなで自由に聞き合って、学びを深めていこう！
学びのプレゼントをたくさん持って帰ってね♪

学部のみなさんの参加も大歓迎です！
お気に入りのお菓子をもって気軽にご参加ください！お待ちしております◎

教育実践と省察のコミュニティ 2018

「新しい時代の教育実践をめざして」

「教育実践と省察のコミュニティ」は、平成26年度より、「教育実践研究フォーラムin長崎大学」と連動して2日間にわたり開催されている。1日目に「実践研究長崎ラウンドテーブル」を2日目に「教育実践と省察のコミュニティ」を開催した。大学院生のポスター発表は22件、附属学校・学部教員の研究発表は26件あり、参加者数は143名(のべ245名)であった。シンポジウムでは、教育現場のニーズの高い道德教育に関わるテーマを取り上げ、講演・協議を行い、今日的な教育課題に関する治験を深める有意義な機会となった。以下は、大学院生および教員によるポスター発表や講演に関する大学院生のコメント等を「ニュースレター No. 16」より抜粋掲載したものである。

(1) ポスター発表について

学級経営・授業実践開発コース 大吉 さやか

ポスターセッションに参加させていただき、たくさんの研究を拝見したなかで、自身の研究に生かしたいことや、教師を目指すものとして考えていかなければいけないこと等、参考になるものばかりであった。また、大学院の先生方や、先輩方、附属小学校の先生方がどのような研究を行っているのか知るきっかけになり、改めて、色々な視点から捉えることができるのだということを考えることができた。さらに、ポスターセッションでは、発表者と観察者がその空間で一緒に、研究について議論できるので、様々な意見に触れ、視野を広げられるいい機会だと思った。新たに学んだことや見えてきた課題をもとに、今後の実践や大学院での学びに繋げていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 山口 真優希

ポスターセッションには、教育学研究科の方だけでなく、長崎大学の教授や附属学校の先生方等、教育に携わる多くの方々が参加されていた。多くの方々が予測困難な社会で活躍する子どもたちのために、とても熱心に発表を聞いたり、質問をされており、その姿に圧倒されてしまった。私は、先輩方や附属学校の先生方の発表を聞く側として参加させていただいて、たくさんの方の見方や考え方を得ることができた。また、今後どのように研究を進めるべきなのかの方向性を定めるヒントも得ることができた。来年は発表者としてこの経験を活かし、来年もまた教育に携わる方々と深く学び合うことができるような会にするために、自身の研究に力を入れていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 山口 大樹

ポスターセッションでは、教育課題を、実践研究を通して解決する院生や教員、附属の先生方の実践が報告された。教育委員会の方、現場の教員、研究する教授や院生等、様々な視点をもった参加者によって、質問や意見が飛び交った。発表者と参観者の距離が近いことで、対話がしやすく、実践研究について多面的・多角的に考え、議論し、深められていった。私自身の実習での課題であった教科の指導について、体験を踏まえながら対話することで発表者と参観者の私の双方に学びがあったと考える。私も来年、この場で発表することを想像するとワクワクする。子どもたちにより良い学びや人生を送るきっかけを与えられるよう、精進していきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 本田 花菜子

教職大学院ならではの実践的な内容で、これまでに関わってきた子どもたちのことを思い起こしながら身近な教育課題としてお話を聞くことができた。どの研究も新鮮で興味深く、「これは知らなかった！」「今後の自分の研究に生かしたい！」「教員になった時に使いたい！」と思うものばかりだった。また、非常に質問しやすい雰囲気だったため、大勢の前では聞きにくい初歩的な疑問から質問したり、納得できるまで議論したりすることができ、丁寧に研究について理解を深めることができた。来年は発表者になるので、「専門家でなくても誰が聞いてもわかる発表」を心がけしっかり準備を行おうと、身の引き締まる思いがした。

子ども理解・特別支援教育実践コース 松井 奈々

大学院生、大学教員、附属校の先生、公立校の先生、教育センターの方などが同じ空間に集まり、議論を行いながら学びを深めていくことが非常に新鮮であった。様々な経験や専門性をもった先生方のポスターをもとに、様々な分野の人たちが質問や意見をしながら議論を行うことは、発表者、参加者とも新たな視点が生まれ、視野が広がり、お互いに学びが深まるいい時間であった。それと同時に、様々な経験や専門性をもった人たちがつながることの大切さを体験をもって感じた。また、自身の研究をどのように進めていくのか、どのような実践を取り入れていくのかなど自身の研究を見直すいい機会であった。ここで学びを自身の研究に活かしていきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 野田 若菜

ポスターセッションでは、現在の教育現場における多様な教育問題から研究が進められていて大変良い学びになった。専攻している分野以外の研究や現職の先生方の研究にも触れることができ、教職大学院生としての学びをどのように生かしていくのか考える貴重な機会となった。また、発表者と参加者の距離が近く、活発な意見を共有でき、教育について考えさせられる有意義な場であった。自分自身の研究につながる研究報告も聞くことが

でき、新たな課題等を見つけることができた。今後、研究を進めていくにあたり、この経験を生かしていきたい。

(2) ポスター発表の総括について

教科授業実践コース 小川 大輔

初めて参加したポスターセッションの総括を二人の方からお聞きして、ポスターセッションの発表を振り返りながら、自分の中で内容や考えをまとめることができたと感じます。総括は2部構成であり、前半ではポスターの実践研究の内容ごとにカテゴリ分けをされており、実践ごとの内容の感想を他の実践と結びつけながら話されていて、整理することができました。また後半は長崎大学の研究と宇都宮大学の実践研究を上げることで、長崎大学にはない新しい考え方を学ぶことができ、視野を広く持つことが大切だということがわかりました。このポスター総括で学んだことや、新たな視点を今後の自分の実践研究に活かしていきたいと感じます。

学級経営・授業実践開発コース 中俣 浪漫

ポスターセッションの総括の中で、ポスター発表を「言葉に体温が乗っていた」と評していたことが印象的だった。それは、その後説かれていた『「なぜ研究をするのか」その研究に価値はあるのか』など『そもそもを問うこと』の重要性」とも関連するのではないかと感じた。「そもそもを問う」た上で自分自身の中に研究の意義や価値が確立していればそれについて語る言葉は自ずと熱を帯び、反対にその点が不明瞭だと聴き手に響かない淡白な発表になる、ということだと理解した。また、それは教壇に立った際にも「なぜ教えるのか」という根本を教員自らが問い続けることで児童生徒の中に残る授業ができるのだということと同時に意味すると感じた。

学級経営・授業実践開発コース 田村 健太郎

ポスターセッションの総括を木村国広さん、久保田善彦さんに行っていただいた。お二人の話に共通するものとして「教育に対する熱意」に対するものがあつた。教育の現場において実績のある先生方に教育に対する熱意があると認めていただいたことは誇りに感じた。その一方で、自身の研究を冷静な視点で見る力も必要であることも教えていただいた。そもそも研究を行う目的は何だったのか、自身の研究に対する評価は客観的に見て妥当なものであるか。研究を進めて行くにつれてこのような面において当初の予定とズレが生じつつある。残された時間は少ないが、今回のフォーラムで学んだことを活かして、意味のある研究となるよう努力していきたい。

学級経営・授業実践開発コース 森竹 恭眞

「何のために実践研究を行っているのか。」この言葉が、ポスター総括を通してとても印象的であった。今回のポスターセッションで取り上げられた実践研究については、どれも学校現場をとりまく課題に焦点が置かれている。だからこそ、現場の課題や疑問について、実習校や大学など、様々な場面で時間をかけて考える機会が得られていることは幸せなことだと改めて感じた。今後は実践研究の総括に力を入れていきたいと考える。そして、教師になったら、予測困難な時代の中で自分の実践研究が学校現場で生かせるように、子どもたちに何を教え、何を身に付けてほしいのか、明確な目標をもって取り組んでいきたい。

教科授業実践コース 浦川 真紀

木村さんの話を受け、「人はなぜ学ぶのか」ということについて、物事を自分で判断できるようになるために、他人の立場がわかるために学ぶという点が印象に残った。自らが学んでいなければ、判断するための根拠がないため、物事を自分で判断することができず、他人の意見に流されてしまう。自分と他人の違いを認識し、他人の立場や他人の考えを理解し、考えの多様性について理解するためにも、学び続ける必要がある。これからも、「人はなぜ学ぶのか」ということを自分なりに考え、自らも学び続けていきたいと思う。また、研究を行う際には、episodeとevidenceを明らかにし、何のために研究をしているのかということ常念頭に置いて、研究を進めていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 椋尾 宗太郎

「あしもとにある課題を大切にする。」総括の中での言葉である。教職大学院での実習や講義において、「学び続けること」の大切さを実感してきた。その学び続ける土台となるのは、「自分のあしもと」にあるのだと話された。ポスター発表では、どの研究も「あしもと」の課題から生まれていた。だからこそ、学び続けることに終わりはないのだと強く感じた。そして、私は何のために研究しているのかという問いを常にもち、実践研究を行ってきたい。学ぶことの本質を子どもと共に問い続けながら成長するために。そのために謙虚に、そして真摯な姿勢で学び続けたいと思う。

(3) シンポジウム（カリキュラム編成と授業づくり）に関する 講演について

教科授業実践コース 佐田 彩佳

本講演を受け、「カリキュラムは作り続けるものである」という言葉が非常に印象に残っている。今日では、時代の変化に伴い、教育にも常に変化が求められる。小中連携の下でカリキュラムマネジメントを行う事例を目前にし、学校を核とし、家庭や地域、更には異

校種で連携が求められるということを認識した。教師は、学校を取り囲む様々な人々から学び、子ども達をどのような姿に育てていくべきかを彼らと共に考え続けなければならない。教師を目指す者として、私自身も失敗を繰り返しながら変わり続けなければならないという強い思いを抱いた。「変化と連携」を相互作用させ、子ども達の学びと成長を保障する教育の場を守り続けるよう努めたい。

教科授業実践コース 本木 和幸

小中一貫校におけるカリキュラムマネジメントの事例から、異校種の教師間、子ども間、教師と子どもの交流からの教師の学びと知見を確認した。我が国において、小中一貫校の数は多くない。しかし小中一貫とすることで、教師は異校種との連携も強く必要となる。そこでは、異校種の授業参観や、9年間の子どもの姿を捉えていくことなどから多くの学びがある。9年間を通しての子どもの成長を描き、期間ごとにカリキュラムを見直していく。これは学校全体で行っていく必要があり、教科や学年、個人は縦横に連携する必要がある。私は教師になり、1人の子どもの教育に関わる中で、何ができるのだろうか。校種、教科を超えた学びを常に求めていきたい。

教科授業実践コース 八尋 慶一郎

今回のシンポジウムでは、教師によるカリキュラム開発の重要性について学んだ。平成29年度告示の新学習指導要領では「生きる力」を子どもたちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を見直すことが必要だと述べられている。そして、今回のシンポジウムの経験から教師による学習の意義を見直すことは、カリキュラムの深い理解を通して新たにカリキュラムを再構築することと同義と考えた。子どもの実態や社会の期待する学校像は絶え間なく変化している。私たち教師はその変化に遅れを取ってはならない。絶えず学び続ける姿勢を持ちながら、カリキュラムの見直しを行うことで、時代の流れに対応した教育を行うことができるだろう。

教科授業実践コース 林田 太一

今回は、カリキュラムマネジメントが学校にどのような影響を与えたのか小中一貫校の事例から多くの学びを得た。本事例は、小中一貫校ということもあり、教科の特性と校種の特性等を活かしたカリキュラム編成の重要性を指摘していた。また、小学校と中学校が一貫して同じ環境下に置かれることで、教師どうしの学びに加え、意図しない学年の交流が図られていた。その交流を通して、子どもに成長の機会が与えられていた。小中一貫で教育を行うということまでカリキュラム編成時に意識されることで、様々な学びが子どもや教師に促進されていた。小中一貫校に勤務しているかどうかに関わらず、他校種の教師どうしの学びを積極的に求めたい。

教科授業実践コース 山隈 俊

カリキュラムマネジメントを通して子どもの成長を学ぶというテーマで、様々な学びを取り入れることが出来た。カリキュラムマネジメントは最も重視される側面であり、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育の目的を踏まえたうえで教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。本研究ではカリキュラム開発について実際の学校2校で実践が行われていた。研究には実践が必要不可欠であり、長期的に研究を行う事でより深く信憑性の高い結果が得られる。自分の知識がまだ浅い部分もありもっと自分の知識がついていけば今以上自分の力になった。これからもっと教職に対して自分の学びを深くしていきたい。

教科授業実践コース 岩田 桂子


講演の中で、特に印象深かったのは、小中一貫校の事例であった。行政の必要によって一貫校は導入される場合が多く、教師の必要感によるものではない。まだ、一貫校は多い訳ではなく、赴任する可能性は低い。しかし、現在は別々に教育活動を行っている小中間であっても、必ず小学校を卒業した子供たちは中学校へ進学していく。一貫校でなくても、小中の教員が連携することは子供たちにとって有効であると考え。6年生だけでなく、他学年でも中学校の先生にゲストに来ていただき、専門的な知識や技能を指導していただくことには意義がある。また、互いの授業を参観し合うことで、子供の発達や学習の様子を知ることができるからである。

クロスセッション 2018

「クロスセッション」は、大学院学生が主体的に年間4～6回程度を目途に、時間割外に開催している自主セミナーであり、平成21年度から実施されている。発表担当の学生が文献研究や実習の要点をプレゼンテーションした後に、その内容に関して、他の学生や教員が一緒になって質疑応答を行う。教員は、その学生が今後検討すべき課題、その考察手順、方法等を助言するとともに、プレゼンテーションのスライドや配付資料についても改善点を指摘、助言して、大学院学生の実践力向上を支援している。こうした学び合いの機会をとらえて、学部卒大学院生、現職教員大学院生が共修、協働し、研究者教員、実務家教員も一緒に参加して議論することにより、討論(理論)と実習(実践)の有機的な往還が可能となるよう努めている。

(1)子ども理解や特別支援教育に関するクロスセッション

子ども理解・特別支援教育実践コース第1回クロスセッションは、学級経営・授業実践開発コース第3回クロスセッションと合同開催しました。



教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第2回 クロスセッション～

日時：7月31日（火） 16：10～17：40
場所：31番教室

M3 平野 晶子
『小学校におけるインクルーシブ教育の
推進に関する実践的研究
－発達支援に活かした学級コミュニティ形成の視点から－』


M2 石田 早季
『小学校におけるキャリア教育
それぞれが目標に向かって意欲的に取り組める環境づくり』

M2 兼 祥子
『自閉スペクトラム症児における勝ち負けの
こだわりに対するストレス調整』

M1 本田 花菜子
『知的障害のある自閉スペクトラム症児のコミュニケーション
スキルの向上のための授業や指導・支援について』

M1 松井 奈々
『互いを認め合うことが居心地の良い学級作りに及ぼす
効果について－通常学級における対人関係形成が苦手な
児童に焦点を当てて－』

M1 野田 若菜
『自閉症児における非音声的コミュニケーションについて』



教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第3回 2月 クロスセッション～

日時：2月27日（水） 10：30～12：00
場所：22番教室

●**M1 野田 若菜（のだ わかな）**
『児童へのアンガーマネジメント』

●**M1 藤澤 真規子（ふじさわ まきこ）**
『実習4までの振り返り』

●**M1 本田 花菜子（ほんだ かなこ）**
『知的障害のある自閉スペクトラム症児の
コミュニケーションスキルの向上のための指導について』

●**M1 松井 奈々（まつい なな）**
『互いを認め合うことが居心地の
良い学級作りに及ぼす効果について
～通常学級における対人関係形成が
苦手な児童に焦点を当てて～』

(2)学級経営や授業実践開発に関するクロスセッション

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース
H30年度 第1回 クロスセッションのご案内

話題提供者

- M2 小鉢 拓 (小学校)
- M2 濱崎 知彦 (小学校)
- M2 矢島 佑樹 (小学校)
- M2 柳川 優希 (中学校理科)
- M2 大石 湊 (中学校数学)
- M2 森竹 恭真 (中学校社会)



日時：5月18日(金) 16:10~17:40

場所：教育学部 第2コンピューター室

形式：ラウンドテーブル

テーマ：実習・研究について

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。

参加したい、興味があるという方はお気軽に、下のアドレスへご連絡ください。



学級経営・授業実践開発コース M2 松永 千茄
E-mail: bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース
H30年度 第2回 クロスセッションのご案内

話題提供者

- M2 朝倉 諒 (特支)
- M3 テイ ショウ (小学校)
- M2 松尾 頼亜 (中学校数学)
- M2 城戸 佑也 (中学校理科)
- M2 田村 健太郎 (高校数学)



日時：6月15日(金) 16:10~17:40

場所：教育学部 第2コンピューター室

形式：ラウンドテーブル

テーマ：実習・研究について

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。

参加したい、興味があるという方はお気軽に、下のアドレスへご連絡ください。



学級経営・授業実践開発コース M2 松永 千茄
E-mail: bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

子ども理解と
合同開催！！

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース

平成30年度 第3回 クロスセッションのご案内

話題提供者

本多利衣	「多様性を尊重し合うコミュニケーションづくりに関する実践的研究 - 小学校における発達障害児を念頭に置いた障害理解教育実践」
下田みのり	「ちがいを理解し、互いに認め合える学級づくりを行うための手立ての実践・検証 - よさを発見する活動の実践を通して」
藤澤真規子	「一人一人の自己実現を支え、心の居場所となる学級作り - 通常学級に在籍する支援を要する児童と他児童の関わりを通して」
中上由加里	「生徒の「聴く力」向上のための手立ての模索 ~主に学級活動における集団的アプローチを通して~」
松永千茄	「実習を通して学ぶ、あらゆる子ども達との向き合い方について」
椋尾宗太郎	「実習1における気づきと反省を生かした実習2での授業実践に向けて」
大吉さやか	「実習1での見取りを、実習2における授業実践に活かすために」
山口真優希	「実習2の授業実践において、継続的に学習に向かわせるための手立てについて」

日時：7月20日（金） 16：10～17：40
場所：教育学部 11 番講義室
形式：ラウンドテーブル
テーマ：実習・研究について

大学院でどのような研究や実習が行われているかに興味がある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。

参加したい、興味がある方はお気軽に下のアドレスにご連絡ください。



学級経営・授業実践開発コース M2 松永千茄
Email:bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース

H30年度 第4回 クロスセッションのご案内

話題提供者



- M1 大吉 さやか (小学校)
- M1 椋尾 宗太郎 (小学校)
- M1 山口 真優希 (小学校)
- M3 山口 大樹 (小学校)
- M3 中俣 浪漫 (高校国語)

日時：10月19日（金）16:10～17:40
場所：教育学部 第2コンピューター室
形式：ラウンドテーブル
テーマ：実習・研究について

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。

参加したい、興味があるという方はお気軽に、下のアドレスへご連絡ください。



学級経営・授業実践開発コース M2 松永 千茄
E-mail: bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース
H30年度 第5回 クロスセッションのご案内

話題提供者



- M3 中俣 浪漫 (高校国語)
- M3 山口 大樹 (小学校)
- M2 小鉢 拓 (小学校)
- M2 松永 千茄 (小学校)
- M1 柳川 優希 (中学理科)

日時：12月21日 (金) 16:10~17:40
場所：教育学部 第2コンピューター室
形式：ラウンドテーブル
テーマ：実習・研究について

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方はお気軽に、下のアドレスへご連絡ください。

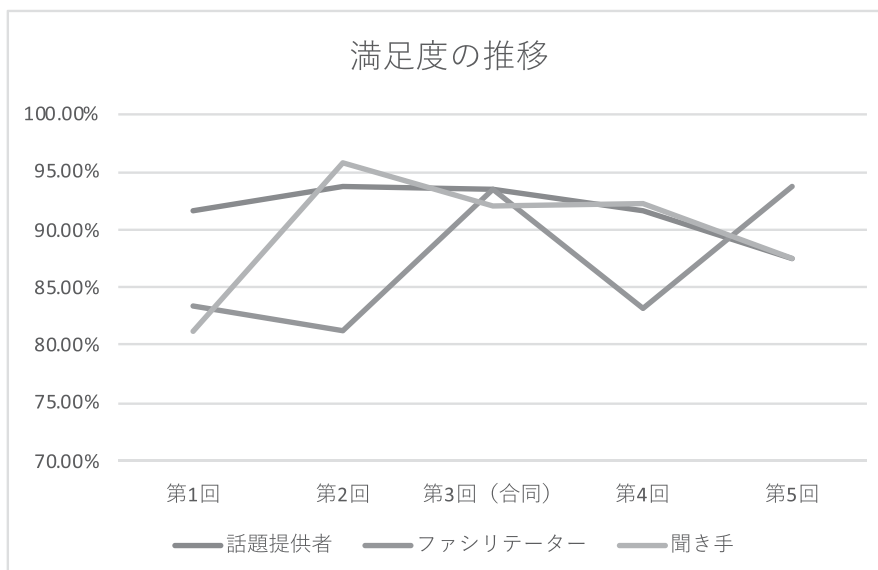


学級経営・授業実践開発コース M2 松永 千茄
E-mail: bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

学級経営・授業実践開発コース クロスセッション満足度

	第1回	第2回	第3回 (合同)	第4回	第5回
話題提供者	91.60%	93.75%	93.57%	91.60%	87.50%
ファシリテーター	83.30%	81.25%	93.57%	83.20%	93.75%
聞き手	81.20%	96%	92.03%	92.20%	87.50%

満足度の推移



教育実践研究成果の発表概要

24名の発表者(1名はインフルエンザのため欠席、1名は風邪により院生代読による発表)による平成31年2月15日、16日の日程で、文教スカイホールを会場に開催された。本発表会は、理論と実践を架橋する教育を目指す中で、大学院生の多様な研究成果を地域や学校現場に還元することを旨としている。長崎県教育委員会、各市町教育委員会、長崎県教育センター及び県内の全ての小・中・高等学校に広く周知することにより、大学教員42名、学外教育関係者23名、学部生3名、一般1名、発表者を含む大学院生43名の合計112名の参加を得た。研究成果は、教育実践や学級経営上の課題解決に資するものや、子ども理解や特別支援教育などの実践的な発表であり、参加者と活発な質疑応答がなされた。以下に、今年度の発表者とその発表概要を記す。

(1)発表者及び発表概要

第1日(平成31年2月15日(金))発表者(発表順)

1 濱崎 知彦 「児童の振り返りを学びにつなげる授業実践」



大学院の2年間で、講義や実践実習、ゼミでの省察、クロスセッション、院生同士の対話などを通して、私自身、教師として大きく成長することができたと感じている。児童との関わりに関しては、児童の発達段階や特性を見取り、児童に合わせた関わりを意識するようになった。授業実践に関しては、児童に対する願いや意図をもって、児童を学びの中心に据えた実践を行うようになった。そこで、児童主体の学びを実現するため、本実践研究では、振り返りシートを使用して、児童が自分自身で学びを振り返り、次の学びにつなげることができるようになるための教師の手立てについて検討した。成果としては、児童が振り返りをを用いて学びを次の学びにつなげる意識をもって活動を行っていたことが分かった。今後は、大学院での成長や実践研究の成果を生かしながら、新たな学びを吸収して、児童や学校に還元していく。そして、実践を通して教師として絶えず成長していきたい。

2 松永 千茄 「相手意識をもったコミュニケーション活動を取り入れた小学校外国語活動の実践」



本実践研究は、少人数学級において相手意識をもたせる小学校外国語活動の授業デザインと実践を目的とした。そこで、リアクションフレーズを活用し、相手の話に理解を示す反応をしたり、話をうまく引き出そうと反応したりしながら相手意識をもつことができる授業を目指し、改善を繰り返しながら授業実践を行なった。実習1では、少人数学級の課題把握を行いながら、外国語活動でのコミュニケーションタイムの観察及び実践を行なった。実習2では、聞き手が、自分が理解できているかを示すことができるような実践を行なった。実習3では、リアクションフレーズを用いて反応の仕方に着目した実践を行なった。実習4では、リアクションフレーズを精選・整理し、相手意識をもったコミュニケーション活動を取り入れた実践を行なった。その結果、リアクションフレーズは、相手の話に理解を示したり、話をうまく引き出したりするための手立てとなりうるということが分かった。

3 矢島 佑樹 「児童の発話を促す教師の手立て」



本実践研究では、各実践実習での授業観察や教師へのインタビュー、児童の実態から「児童の発話を促す教師の手立て」に関する知見を得た。また、各実践実習における授業実践では、「児童の発話を促す教師の手立て」を取り入れることを通して、児童の発話を促す教師の有効な手立てについて検討した。授業実践では、授業観察で得られた「児童の発話を促す教師の手立て」を取り入れることによって、発表することが苦手な児童や、考えることが苦手な児童から発話を促すことができたと考えた。私自身の教師の成長として、児童の表情や姿勢、態度に応じて授業を展開できるようになった。また、授業後の省察を行い、授業を見直していくことが「児童の発話を促す教師の手立て」に結びつくのではないかと考えた。これからは教壇に立っていく中でさらに「児童の発話を促す教師の手立て」について研究を進めるとともに、教師として絶えず成長していきたい。

4 石田 早季 「小学校段階におけるキャリア教育の一検討-それぞれが目標に向かって意欲的に取り組める環境づくり」



本実践研究では、小学校段階におけるキャリア教育の一環として、「自分のよさや可能性への気付きから、目標に向かって努力する態度を養う」と同時に、「それぞれが目標に向かって意欲的に取り組める環境づくり」をねらいとした教育活動の検討を行った。具体的には、キャリア教育で育成したい基礎的・汎用的能力のうち「自己理解・自己管理能力」に焦点をあて、「構成的グループエンカウンター」を取り入れた学級活動と短学活を計画・実践した。一人ひとりが認められたと感じる場面の設定と、他者の短所や失敗に寛容で共感的な雰囲気醸成を目的とした活動の積み重ねは、友だちのよさや頑張りを目を向けようとする意識を高め、肯定的なフィードバックを与え合う関係は、児童が自分のよさを自覚し発揮することへのつながりを期待することができた。今後も、学校現場におけるより継続的な実践によって、自己効力感や自己実現への意欲の向上を図っていきたい。

5 小鉢 拓 「小学校特別活動におけるキャリア教育の実践に関する一考察-自己指導能力の育成に焦点を当てて」



本実践研究は、小学校特別活動において「自己指導能力」を育成することが目的である。また、自己指導能力を育成することは「キャリアプランニング能力」を育成することにつながっている。上記目的のもと、A町立X小学校の5年P組を対象に、授業実践を行った。授業実践では、ワークシートを活用することで、時系列を意識した生活目標・行動目標の設定を目指した。また、伝え合い活動を行うことで目標を他者と共有し、認め合うことを目指した。この二つの手立てによって、児童は、過去の自分と生活目標を結び付けて考え、目標達成に向けて、日々実践していく意欲を高めることができた。また、児童が自ら設定した目標を達成すべく日々の生活の中で実践していくためには、児童が日々の生活で目標を意識できるように日常的な指導を継続して行う必要があることがわかった。この日常的な指導の手立てについては、今後教師として実践する中で検討していきたい。

6 下田みのり 「ちがいを理解し互いに認め合える学級づくりのためのアプローチ—かかわりを深化する活動の実践を通して—」



小学校段階は、社会性を育む基礎となる時期である。本実践研究では、「かかわりを深化する活動」を実践し、その効果について明らかにすることを目的とした。まず、実態把握等から居心地のよさを高めるために必要となる、①安心②自己表現③助け合い④認め合いという四つの要素を見出した。それらを踏まえ、構成的グループエンカウンターの手法を用いた短学活、国語科授業、常時活動の実践を行った。その結果、同じ活動を、質を高めながら行うこと、自己表現すること、四つの要素を螺旋的に関連させ、児童の変容を把握しながら実践することの三点が、お互いのことを知り合うことにつながり、ちがいを理解し互いに認め合える学級づくりに有効だということが示唆された。また、教師自身が児童一人一人の個性やちがいを理解し、その子らしさを認めるとともに、児童同士のつながりを意識することの重要性を見出した。

7 鄭 婕 「異質性の扱い方に関する考察—文化の「非交換性」を通して—」



本研究では、文化の「非交換性」を意識しつつ「異質性」を扱う教育を通して「異質性」を認識すること、そして自他尊重や他者と力を合わせて課題を解決する力を育てることをねらいとした。また、実践研究に当たって日本の小学校における「異質性」を扱う教育のプロセスを試みた結果を述べ、実践可能性を検討した。具体的には、中国語タイムにおける活動や国語科授業を通して、「違い」を意図的に提示し、「違いの構造」の変容に気付くことができるような手立てを行った。また、文化の「非交換性」に気付くことができるように、複数の「場」を提示することで、児童に「場」意識をもたせることを意図した。本研究では、質的研究のプロセスを用いて、思考支援ソフト「MAXQDA」を使って児童のワークシートについて分析を行った。その結果を基に考察し、「異質性」を扱うことは異文化理解だけでなく自文化理解にも効果が見られ、その有用性が示唆された。

8 平野 晶子 「小学校におけるインクルーシブ教育の推進に関する実践的研究—相互の理解の深化を促す道徳科の授業開発—」



本実践研究では、通常学級におけるインクルーシブ教育の実現に向けた多様性や共生のあり方を視野に入れた相互の理解の深化を促す道徳科の授業開発を行った。道徳授業①～③とアクティビティ A～Cを交互に組み合わせて実践を行った。実践研究の結果、相互の理解の深化を促す道徳授業の開発には、①ペアやグループでの活動を積極的に取り入れること、②学習の流れの中に、多様に考える活動や時間を意識的に設定すること、③教師による児童の考えや発言、眩きなどを多様に受け止めること、の三点を意識した工夫の必要性があることを明らかにした。この三点を踏まえた道徳科の授業開発が進められることで、インクルーシブ教育に向けた多様性を養うことができるのではないかと考える。またこれらの実践は、学校全体で共通認識を図り、継続的な実施が望まれる。今後は学校現場や児童の実態に応じて、継続的に実現可能な授業開発を検討し、実践を行っていきたい。

9 兼 祥子 「知的障害のある自閉スペクトラム症児に於けるストレス調整」



本実践研究では、特別支援学校に在籍する知的障害のある自閉スペクトラム症の児童1名を対象とし、ストレスの状態の観察と軽減を図る介入を行い、その指導・支援の効果や課題を検討することを目的とし実践を行った。まず、唾液アミラーゼ検査と表情カードの選択、行動観察の3つの指標を用いてストレス評価を行い、ストレスの検討を行った。その結果、身体面の唾液アミラーゼ検査の結果と行動面の行動観察から得たエピソードはほぼ一致したため、生理的指標は活用できる可能性が示唆された。そして、そのストレスの検討のもと、情動焦点型コーピングが有効であると考え、ストレスリリーサーの活用と昼休みの遊びを構造化する2つの介入を行った。昼休みの遊びの提案の介入後は、唾液アミラーゼ検査や行動観察からはストレスが高いという結果は得られなかったため、コーピングとしては一定の効果がみられたと考えられる。

10 本多 利衣 「多様性を尊重し合うコミュニケーション作りに関する実践的研究－小学校における発達障害児を念頭においた障害理解教育実践－」



本実践研究では、他者とのコミュニケーションに困難があり、通級指導教室による指導を受けている児童1名及びその児童が在籍する学級を対象とし、お互いの多様性を尊重し合えるような学級作り・授業実践について研究することを目的とした。

児童が目に見えない人間の「ちがいを深く理解することができれば、多様なちがいを持つ他者を尊重することにつながると仮定し、人間の「ちがい」について考える授業実践を行った。その結果、「認知のちがい」など、自分自身にもあてはまる「ちがい」とつなげて考える場をつくることで、「ちがい」を肯定的にとらえることにつながった。また、小学生段階で、「特別な支援や配慮」まで考えることは難しいと考えていたが、「ちがい」に気づかせる場を作り、繰り返し振り返ることで、「配慮」まで思考を深められると示唆された。学年を通じた授業計画や、理解を深めやすい教材の選定など、今後の課題として研究していきたい。

11 中上由加里 「生徒の「聴く力」向上のための手立ての模索－主に学級集団へのアプローチを通して－」



本実践研究は「機能的に問題がないにもかかわらず、聞くことに困難さが見られる生徒」の実態を受けて、通常学級の中でできる生徒の「聞く力」を高めるための集団的アプローチを模索したものである。「聴く」が「聞く」よりも高次元だと判断し、「聴く活動」を通して「聞く力」が引き上がると仮定して研究を進めた。研究にあたっては「きく」を細分化し参与観察や授業実践の中で「きく行為」の背景等を捉えることで、生徒の実態等から「生徒がきくために必要な要素」が見えてきた。「聴く力」を培うためには「聴いてもらう体験」「安心できる人間関係」「安定した日常生活」など必要な要素が様々な存在する。生徒の「聴く力」の向上のために集団的な活動等を用いることが、その集団の人間関係の形成・維持、信頼関係の構築に寄与することが示唆された。今後は、学校が生徒の「聴く」を保障するために、組織全体での共通理解等を意識して教育活動に取り組みたい。

12 朝倉 諒 「知的障害児と肢体不自由児を対象としたICTの効果的な活用」



本実践研究では、知的障害児と肢体不自由児を対象としたICTの効果的な活用について検討した。知的障害児へのICT活用では、工具の使い方について、タブレット端末による視覚支援を取り入れた授業を実践した。タブレット端末で手順を確認し、自分の動きを修正しながら作業に主体的に取り組む姿が観察された。肢体不自由児へのICT活用では2つの実践に取り組んだ。1つ目の視線入力装置を活用した実践では、重度の知的障害と肢体不自由のある児童に意図的な注視を引き出すことをねらいとした教材を作成した。教師によるフィードバックが意図的な注視を促す上で重要な要素と考えられた。2つ目の実践では、発音が不明瞭で伝えることが難しい児童にタブレット端末を活用したコミュニケーション支援を検討した。VOCAアプリを活用することで伝わった経験が、児童の伝える意欲や自信に結びつき、関わりの少ない相手にも伝えるという行動につながったことが考えられた。

第2日(平成31年2月16日(土))発表者(発表順)

13 大石 溪 「中学校数学科における生徒の主体性を高める授業実践－知識構成型ジグソー法を活用して－」



本実践研究では、中学校数学科において生徒の主体性を高める手法として知識構成型ジグソー法を活用して、その実践の効果を検証することをねらいとした。知識構成型ジグソー法は、異なるエキスパート活動で得た知識をもつ生徒が集まって、問題(メインの課題)を考える授業の型である。実践する上で行った主な手立ては、「エキスパート活動の資料の内容を説明中心にする。」「教師から生徒に対する指示を明確にする。」「グループに1つのホワイトボードを配布して考えさせる。」の3つだった。知識構成型ジグソー法を用いた授業と用いない授業を行い、それぞれの授業で事後アンケートを実施した。そして、そのアンケートを比較し、考察した。結果として、本実践研究で行った知識構成型ジグソー法を用いた授業が生徒の主体性に効果があるとは言えなかった。その原因として、エキスパート活動の資料とメインの課題が繋がらない生徒がいたことが考えられる。

14 田村健太郎 「高等学校におけるグループを活用した授業実践－生徒がグループ学習に意義を感じるような授業の実現を目指して－」



本実践研究では、生徒が他者と協働して取り組むことに意義を感じるグループ学習の行い方について明らかにすることを目的としている。介入としてグループ学習を用いた授業を長期にわたって行うことで、協働して取り組むことに対して生徒が持つ印象やグループ学習に対する生徒の取組がどのように変化したか把握する。例えば、わからない生徒が他の生徒にわからないと聞けるようになることは協働して取り組むことに肯定的な印象を持った結果だと考えられる。このような視点に沿って生徒の様子を観察することやアンケート調査によって協働して取り組むことに意義を感じているか調査した。グループ学習を介入として行う前と行った後と比較すると、協働して取り組むことに肯定的な姿勢を示す生徒が増えたため、生徒は協働して取り組むことに意義を感じたと判断した。ただし、生徒たちの学

習集団としての成熟度に合わせて授業の計画および実践することが必要となる。

15 江川 采奈



「高等学校家庭科におけるパフォーマンス課題を用いた授業効果の検討」

本実践研究では、高等学校家庭科において「思考力・判断力・表現力等」を育むことに関して、パフォーマンス課題を用いた授業を実施することで、生徒の「思考力・判断力・表現力等」にどのような変容があるのかを検討することを目的としている。保育分野では題材末に「子どもに向けて手紙を書こう」被服分野では「環境について考えた被服製作～ Yシャツからエプロン～」という課題を実施した。保育分野ではKJ法を用いて他者との意見交換から視野を広げ課題に取り組むことができた。被服分野では、振り返りシートの記述を具体的に表現するようになり、さらに使用しやすい工夫まで考えることができた。本実践から、生徒は自分自身の生活や環境を見直し省察したり、授業での学びを活用し実生活にいかそうとする姿勢が見られた。このことから、パフォーマンス課題を用いた授業実践によって、生徒の「思考力・判断力・表現力等」の変容に効果があることが分かった。

16 松尾 頼重



「全ての生徒がつながりをもって安心して学べる学級経営」

本研究では、生徒が学級生活をつながりをもって安心して過ごせるように、1. 生徒に「話を聴く力」を身に付けさせること、2. 遊びの要素を取り入れた活動「エクササイズ」を行うことを通して、人間関係を構築し、生徒がお互いの個性を認め合い、お互いに協力し合い、学び合える学級経営を行うことを目的とした。「話を聴く力」の実践では相手の立場に立ってどういった態度で話を聴けばよいのかを考えさせ、学級の話や聴くときのルールを作成した。「エクササイズ」の実践では、主に朝の会に生徒同士が関われる時間を作り、班で協力して活動を行い課題の解決を行った。実践を通して、子どもたちが休み時間などに集まって課題を教え合う場面や隣の席の生徒に分からない問題を教え合う場面がみられた。今後は実践の反省や課題を踏まえて、年間を通して「話を聴く力」の育成、「エクササイズ」が行えるような実践を計画していきたい。

17 柳川 優希



「第一線教員の意味決定に関する考察－進路指導を議題とした学年会議の事例分析－」

学校は「ストリート・レベルの官僚制」とも言われており、「上意下達」という単純な仕組みで運営されていない。そこで本研究では、進路指導を議題とした学年会議の事例分析を通して、第一線教員による意思決定の実態を明らかにすることを目的とした。事例分析では、事例における「提案」と「応答」の関係に焦点をあて、意思決定のされ方の一例を示した。また、意思決定場面で、中堅以上の教員に共有されていた「共同歩調」の体制について考察した。その結果、第一線教員は「問題」に〈共同歩調〉で対処していると同時に、「問題」が第一線教員に〈共同歩調〉をさせていることが示唆された。このように、「問題」が教員に〈共同歩調〉をさせるとすれば、「問題」の共通認識により、ストリート・レベル(ボトム)から学校改善へと

働きかけることが可能となる。これらの示唆は、自らが今後、第一線教員として学校運営に携わる上での視点となると言える。

18 須崎美也子 (現職教員大学院生)



「保護者との連携に関する教師のスキルの向上」

本実践研究では、特別支援学校中学部の保護者を対象とし、学校行事を核にした保護者との連携の取り方や支援の内容を整理し、支援段階と教師のスキル向上を目的として実践を行った。まず、子どもの状態のとらえ方をS-M社会生活能力検査で検討し、保護者と教師の認識の違いについて検討した。その結果、学校での活動の様子、保護者の願いなどが相互に理解できているか、という課題があった。そして、学校行事での保護者との連携場面や内容を記録し、整理することで、支援の段階を検討することができた。また、教師のアンケート結果では、保護者との関わりの中で難しさを感じている教師がほとんどであった。実態を適切にとらえ、学校行事の場면을有効に活用することで、教師自身が保護者に対して、現在どの段階の支援が必要なのか、整理することができると考えられる。

19 登本恵里花



「キャリア発達段階から見た高校生の社会性を高めるための取り組み－卒業後の就職・自立を意識した授業実践－」

本研究では、高校生の社会性を高めるための教師の手立てについて授業実践、考察を行った。高等学校への進学率が98%を超える現代においては、よりよい自己実現のために、授業や特別活動を通して社会性を育む工夫が必要とされていると考えられる。普通科・総合学科・専門学科などの学科の違いや学校方針により、その学校の生徒に必要とされる社会性は異なる。実習校1では「話すスキル」「聴くスキル」、実習校2においては「自己肯定感」に注目して実践を行った。卒業後の進路を踏まえ、自分自身がどう生きていくのか、自分には何が向いているのかをじっくりと考えるための土台を、入学してから高校3年間を使って作っていくことが大切である。今後は、横断的にそして分掌の垣根も飛び越えて教員が団結して社会性の育成に取り組めるよう、自己研鑽を重ね、発信できる教師でありたい。

20 小洞 琢己



「高等学校英語科におけるライティング指導について－ストラテジーを明示する指導効果についての検証－」

本実践研究では、英語の授業を通して生徒が自ら学ぶ自律学習を実現させていくことや効率的な授業の模索を目標とした。その手立てとして、生徒にどのように学習をするのかを明示的に教え、学習ストラテジー指導を用いたライティングの授業を行った。その結果、学習ストラテジー指導は生徒のライティングスキルの向上の可能性があると示唆された。しかしながら、自律学習の実現については膨大な時間が必要である。実践終了後のアンケートでは数名の生徒が自らの学習の意思を見せたが、本実践研究の期間では客観的に判断することはできなかった。また、効率についても教育現場には多くの変数が存在し、純粋な比較はできないため、判断が難しいところである。一方で、学習の途中途中で生徒の明るい表

情や真剣に授業内課題に取り組む姿も観察された。このような生徒の姿を大切にしながら今後も実践を続けていきたい。

21 石橋菜々子

「高等学校外国語科におけるスピーキング基礎力を養う－音読活動とシャドーイングの効果と可能性について－」



新学習指導要領の目標や文言から、発信力である「話すこと」の強化が目指されていることが分かる。本実践研究では、「話すこと」の領域に着目し、生徒が自分自身の意思を伝えるためにスピーキング基礎力を養うことが必要だと考えた。具体的には、高等学校検定教科書を活用し、一連の音読活動とシャドーイングを行うことで、スピーキングの基礎力がどの程度身につくかを検討した。その結果、実践を行った生徒のスピーキングテストの平均点は有意に上昇した。実践を通して、授業の中で行う活動の目的を明確にし、生徒にどのような部分に気をつけて活動に取り組むかを伝えることで、生徒の意識が変わることが分かった。さらに、音読活動やシャドーイングには、英語を話すことへの意欲を与えることも可能であった。しかし、中には、実際のやり取りに自信が持てない生徒もいることが課題であり、今後は、実際の場面を想定した言語活動にも取り組んでいきたい。

22 城戸 佑也

「科学的な思考力を育てる授業デザインに関する研究」



教育学部での学びを通して、科学的な思考力を育てる授業に課題意識を持った。そこで本実践研究では、科学的な思考力を育てる教師の手立てを明らかにし、その手立てを基に授業をデザインすることを目的とした。実習1～4を通して、科学的な思考力を育てるためには「習得した知識を活用させて、思考させること」や「わかることを段階的に増やししながら、考えさせること」、「生徒に自分の考えを持たせ、グループで話し合わせること」などの手立てが必要であることを学んだ。実習5では、これらの手立てを基に授業をデザインし実践した。授業実践を通して、生徒の科学的な思考力を育てるためには、「生徒が習得した知識を活用しながら思考し、わかったことを段階的に増やすことで、これまで思考できなかったことが思考できる授業」を行うことが重要だということがわかった。大学院での学びを活かし、今後も科学的な思考力を育てる授業を探究し続けていきたい。

23 森竹 恭真

「問いに対して自分の考えをもち、表現する中学校社会科の授業づくり」



本実践研究では、中学校社会科における教師の発問に注目した。その目的は、生徒が問いに対して自分の考えをもち、表現する授業づくりを実践し、単元構想に基づく問いと、問いに基づく教師の手立てについて考察することである。一単位時間における社会的事象の意味について考える問いと、単元を通して軸となる社会的事象の価値について考える問いを構想し、実践した。これらの問いに対する生徒の記述分析を通して、一単位時間における社会的事象の内容理解だけでなく、単元の軸となる社会的事象の価値を見出すことや、問いに対する生徒の表現を評価することで教師の授業改善を行うこと、教師が発問のねらいと留意点を理解することが重要であるとわかった。これらのことから、単元を通して軸と

なる社会的事象の価値について見出すための問いを構想することの有用性が示唆された。

24 藤田えりか 「読譜力を高めるための授業実践」



本研究では、「読譜力を高め、楽譜を根拠に音楽を形づくっている要素を知覚する」という目的のもと実践を行った。具体的に目指していた生徒の姿としては、楽譜を見ただけでどのような楽曲であるかを頭の中で想像できる力を身に付けていることであった。この目標を達成するために、楽譜の音高やリズムを読む活動を継続的に行ったところ、音高を読むことができるようになった生徒は増加したものの、読み取った音を頭の中で想像することは難しかったようである。また、読めるようにならなかった生徒もいる。リズムに関しては四分音符や八分音符などの簡単なリズムのみを扱っていたため、手本の模倣によって演奏することができ、楽譜の必要性を感じさせることができなかった。今後の教育現場では、楽譜を読ませることにこだわるのではなく、楽譜を読むことと音楽を聴取する活動を効果的に組み合わせた授業を目指していきたい。



長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻
平成30年度教育研究成果報告書

平成31年3月発行

編集・発行者 長崎大学大学院教育学研究科
〒852-8521 長崎市文教町1-14
電話(095) 819-2263

印刷・製本 H.P.第一